



Title	地域社会の生活実践に内在する資源保全のしくみ：沖縄・奄美の自然資源利用から〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	金城, 達也
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11632号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58745
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Tatsuya_Kinjo_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 金 城 達 也

学位論文題名

地域社会の生活実践に内在する資源保全のしくみ
—沖縄・奄美の自然資源利用から—

本論文は、亜熱帯地域である沖縄本島やんばる地域および鹿児島県徳之島を事例に、地域社会における自然資源利用の歴史と現在を記述・分析し、そこから、地域主体の環境保全のあり方を環境社会学的に論じたものである。

本論文は 11 の章からなる。

第 1 章では、先行研究のレビューが行われ、そこから本論文の視点が明らかにされる。すなわち、本論文では、地域社会における自然と社会の関係のダイナミズムを明らかにすること、とくに地域の人びとが日常的な生活実践の中で自然資源をどう位置づけているか、また、自然環境および社会の変化の中でどう継続的に自然資源を利用しているのか、そのメカニズムは何なのかを明らかにすることが目指される。あわせて第 1 章では、本論文で扱う地域の概況と方法論が記述されている。

続く第 2 章では、沖縄本島のやんばる地域について、集落ごとにどのような自然資源利用（森林資源、河川資源、沿岸海域資源）があるか（あったか）が民族誌的に詳細に記述される。とくに自然資源利用の集合的な営み、さらにはその基盤となる社会的なしくみ（とくにコモンズの管理方法）が焦点として記述される。

第 3 章では、同じやんばる地域の自然資源利用の中でも、国頭(くにがみ)村楚(そ)洲(す)集落のマービウミと呼ばれるサンゴ礁漁業に焦点が当てられる。このサンゴ礁漁業は、集落の集団的な漁労であるだけでなく、その分配と贈与においても広い社会関係を含んでおり、その全体がマービウミとも言える。このサンゴ礁漁業自体は今日参加する住民も少なくなっているが、それでも継続しており、また、今日取り組まれている地域おこし事業のシンボルにもなっている。またマービウミによる広い社会関係や「ゆるい」規範が、地域おこし事業を含む今日の地域社会の持続性を支えていることが明らかにされる。

第 4 章から第 7 章までは、かわって鹿児島県の徳之島における自然資源利用が事例として取り上げられる。

第 4 章では、徳之島の人びとの生業活動、とくに徳之島天城町の各集落住民がどのように生業を組み合わせしてきたか、毎年の生業活動暦を軸に、詳細に記述される。さまざま

まな生業を組み合わせることで生活を成り立たせてきただけでなく、「楽しみ」をも含んだ生業複合であることが論じられる。

第5章以降は、徳之島のソテツ景観を主要な対象にして論が展開される。第5章では、徳之島の人びとが、時代による社会変化の中で、ソテツを継続的に利用し、生活戦略の中に組み入れてきた様子が描かれる。保存食や調味料としてのソテツ利用、島内の交易商品としての利用、さらには中間業者を介した輸出産品としての利用まで、さまざまに形を変えながら、生活のための「二次的生業」として継続してきたこととその意味が論じられる。

第6章では、「ソテツ地獄」（大正末から昭和初期の奄美・沖縄で貧しくてソテツしか食べられなかったという歴史的状況を指す）という歴史的イメージがどう外部の視線によって構築されたのかが歴史的な資料を用いて明らかにされる一方で、徳之島住民にとってのソテツの多面的な利用や価値、あるいは住民自身による多様なソテツ認識が記述され、両者の間の乖離とその意味が論じられる。

第7章では、やはり徳之島のソテツを事例に、その共同の利用や管理のあり方が議論される。個人所有のソテツと並んで集落の共有のソテツが存在し、そこに集落のルールが存在すること、その集落共有のソテツがリスク回避の役割を担ってきたことが明らかにされる。利用や所有形態の多様さが人びとの生活を支えていることがここでは議論される。

第8章では、徳之島において生業の大きな変化の中で自然資源利用を持続させてきたことの意味が、「転換力」という用語を用いて議論される。すなわち、稲作からサトウキビ生産への大転換の中で、社会変化をうまく利用する形でソテツ利用が継続し、そのことが人びとの生活に安定をもたらしていることが明らかにされる。「転換力」とは、社会－生態システムが復元力の閾値を超えるような大きな変化を経験したとき、これまでと違うシステムを作っていく能力を指す用語だが、生業の大きな変化とソテツ生産の継続は、この転換力の例として描かれ、その転換力を支えるものとして、社会関係そのものの組み直しや、社会と資源との間の柔軟な関係が重要であることが指摘される。

第9章は、再び沖縄本島やんばる地域に戻り、国頭村宜名真(ぎなま)集落の浮魚礁漁が事例として取り上げられる。漁協の合併などの社会変化にもかかわらずこの浮魚礁漁が地域主導で継続できている背景として、地域固有の流通形態の継続的な実践、メディアを利用した販路確保など、住民の複合的な日常実践があることが明らかにされる。この宜名真の事例を踏まえながら、この章の後半では、やんばるや徳之島の住民たちが、絶えず繰り返す自然、社会双方の変化の中で、資源の位置づけや社会関係を再配置しながら資源利用を継続させていることが議論され、意図的な資源管理とは違う、日常的な実践の積み重ねによる「結果としての資源保全」の可能性が提起される。

第10章は、本論文の補論として、奄美群島における「奄美遺産」という実践や徳之島における「文化財悉皆調査」の事例から、地域環境保全に資する社会実践的な調査の

あり方やその可能性が論じられる。

第 11 章は本論文の結論として、各章の要約がなされると同時に、地域社会の日常へのまなざしと社会实践としての調査研究が改めて強調される。